

平成30年7月豪雨（西日本豪雨）

～倉敷市真備町辻田地区における災害ボランティアの記録～

2018年8月18日～19日

川口 均

はじめに

平成30年7月豪雨によって被災した倉敷市真備町へ、2018年8月18日～19日に日本防災士会が奈良県防災士会メンバーを中心とする災害ボランティアA・Bのチームを派遣した。

この記録は、Bチームによる辻田地区における活動記録である。

真備町は1／4の地域が浸水し、51人の死者を出した。真備辻田地区の死者は6人である。同地区では河川の決壊による浸水被害に先立って、工場爆発にも遭遇し、複合災害の様相を呈している。

第一災害は、7月6日午後11時30分頃、同地区より北方800～1000mの総社市南部に位置するアルミ工場の工場爆発による爆風被害である。

第二災害は、第一災害の直後に発生した同地区より南方1800～2000mの有井（アライ）地区での末政川及び小田川の決壊・越水による浸水である。

辻田地区において、2住宅の浸水家財の片づけのボランティア活動を実施し、他の2住宅ではインタビューを実施した。掲載している住宅内部の写真は依頼者の許可を得て撮影したものである。

複合災害を受けた辻田 地区と発災箇所との距離

第一の発災箇所

工場爆発箇所(アルミ工場)
からD地点までの直線距離
は約800m、ABC地点まで
は約1000m。

第二の発災箇所

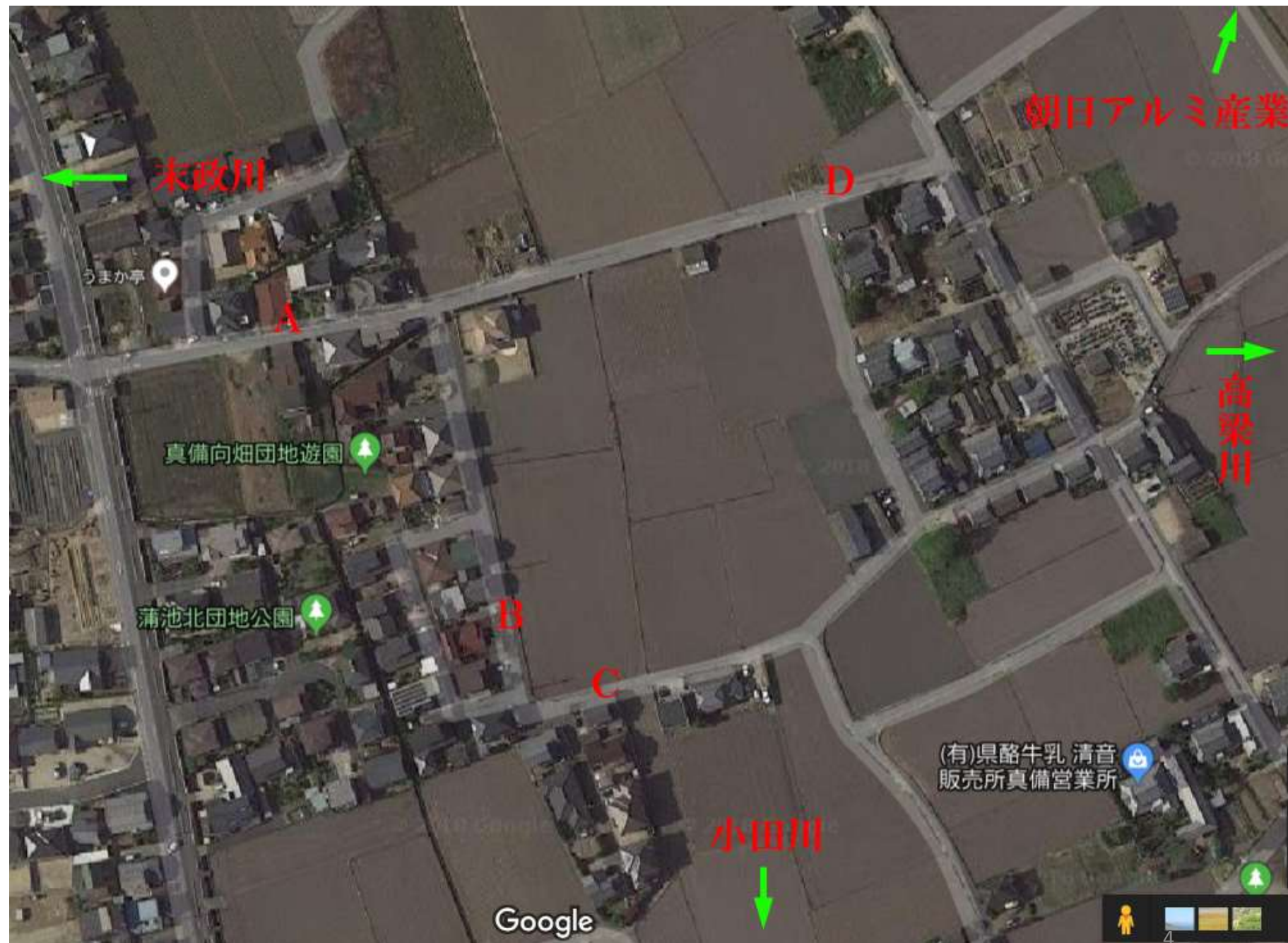
末政川の決壊箇所(有井)。
有井の決壊箇所からD地点
までの直線距離は約2000m、
ABC地点までは約1800m。



位置関係の拡大図

A地点／B地点にて浸水物品の取り出しボランティアを行った。

C地点／D地点にて、被災者の方よりインタビューを行った。



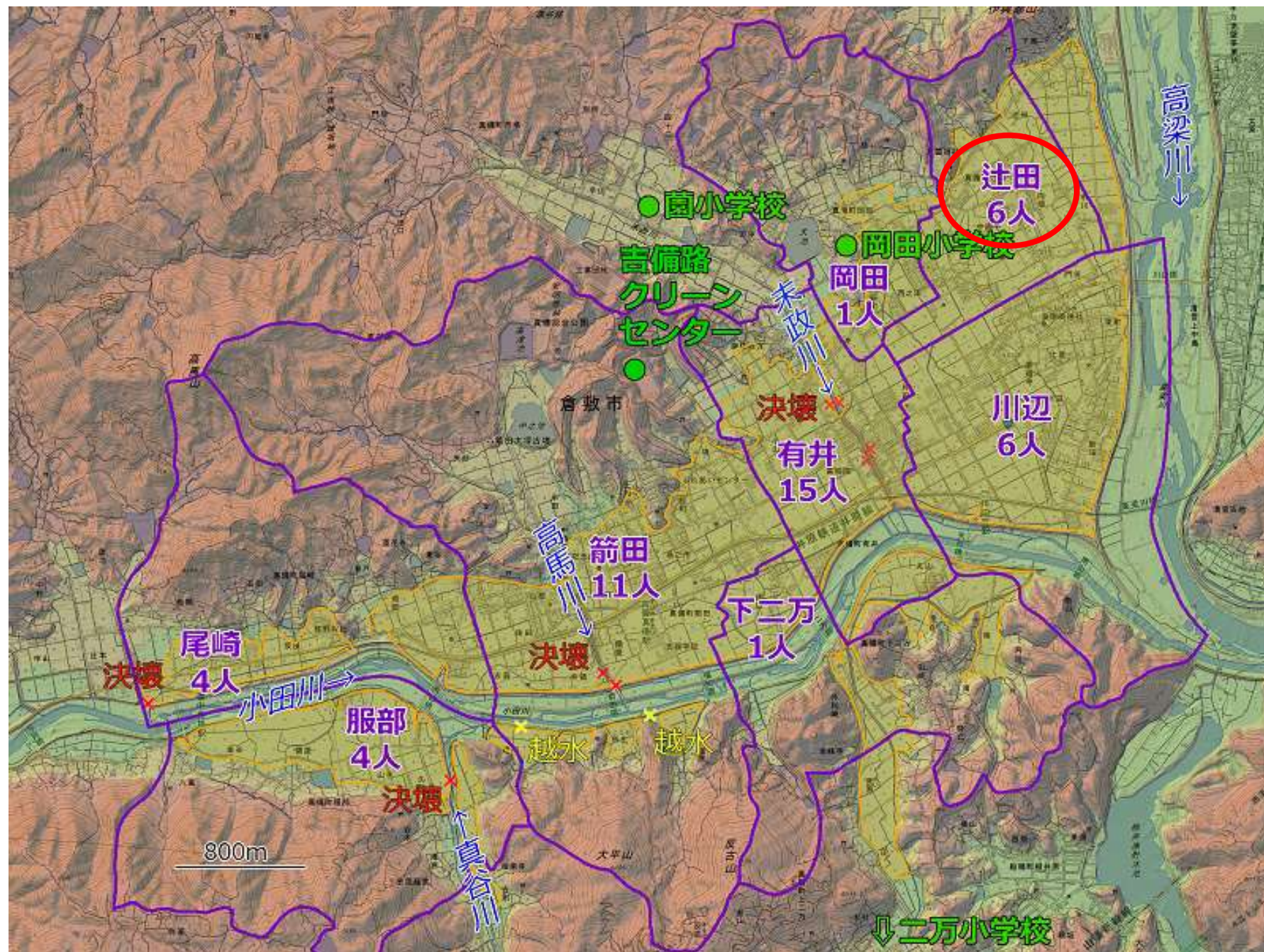
河川の決壊箇所と死者数

辻田地区を訪問

訪問地は真備町辻田及び向畑地区。

最新の地図では向畑地区の存在を確認できないため、本記録では両地区を辻田地区と統一的に呼んでいる。

辻田地区の東方に高梁川、南方に小田川、西方に末政川が流れる。末政川が決壊し、辻田地区において死者が6名。

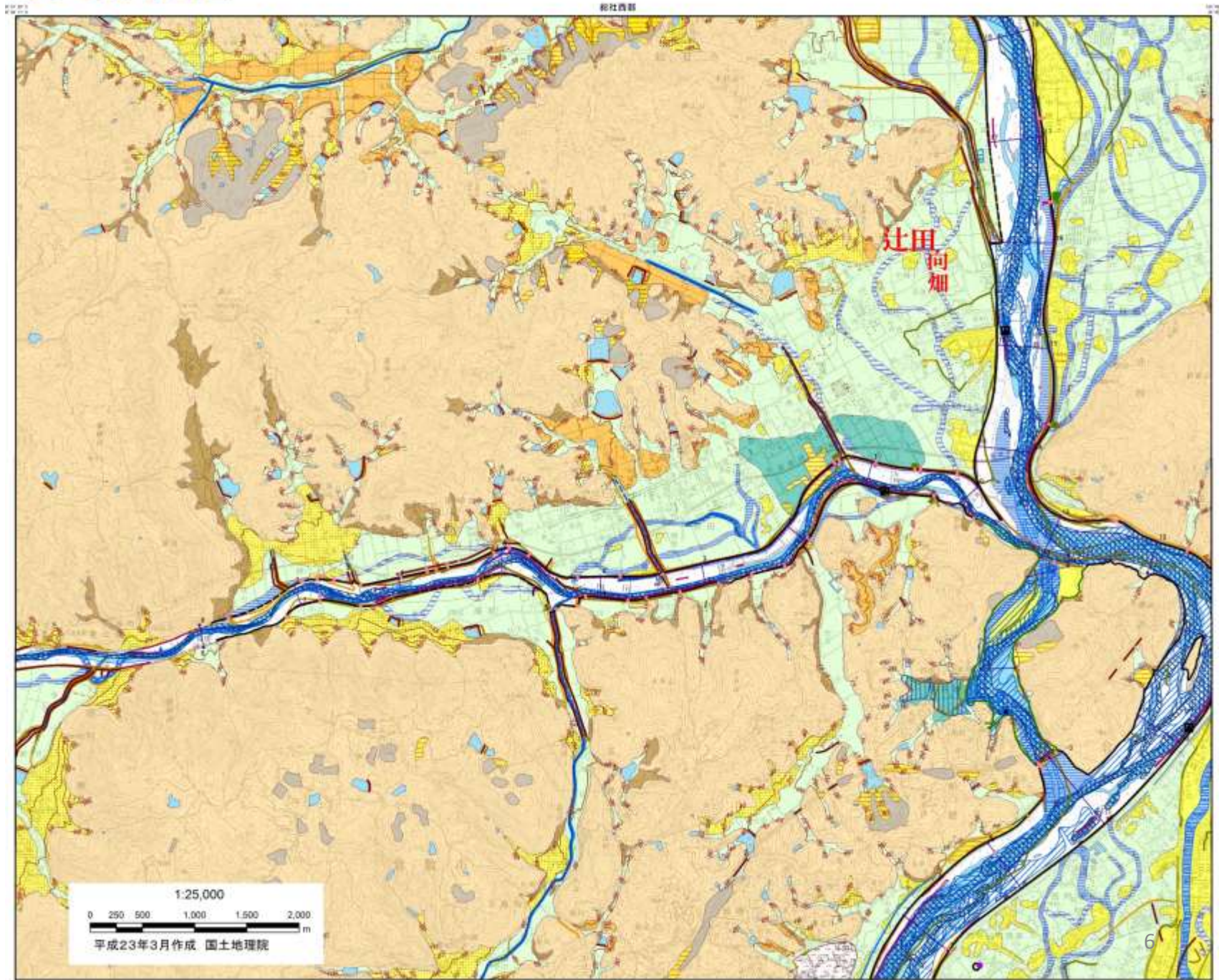


真備町の治水地形図

辻田地区は東南西と**3方向**
が河川に囲まれており、さらに、
地区内には**旧河道**が2本通っ
ている。

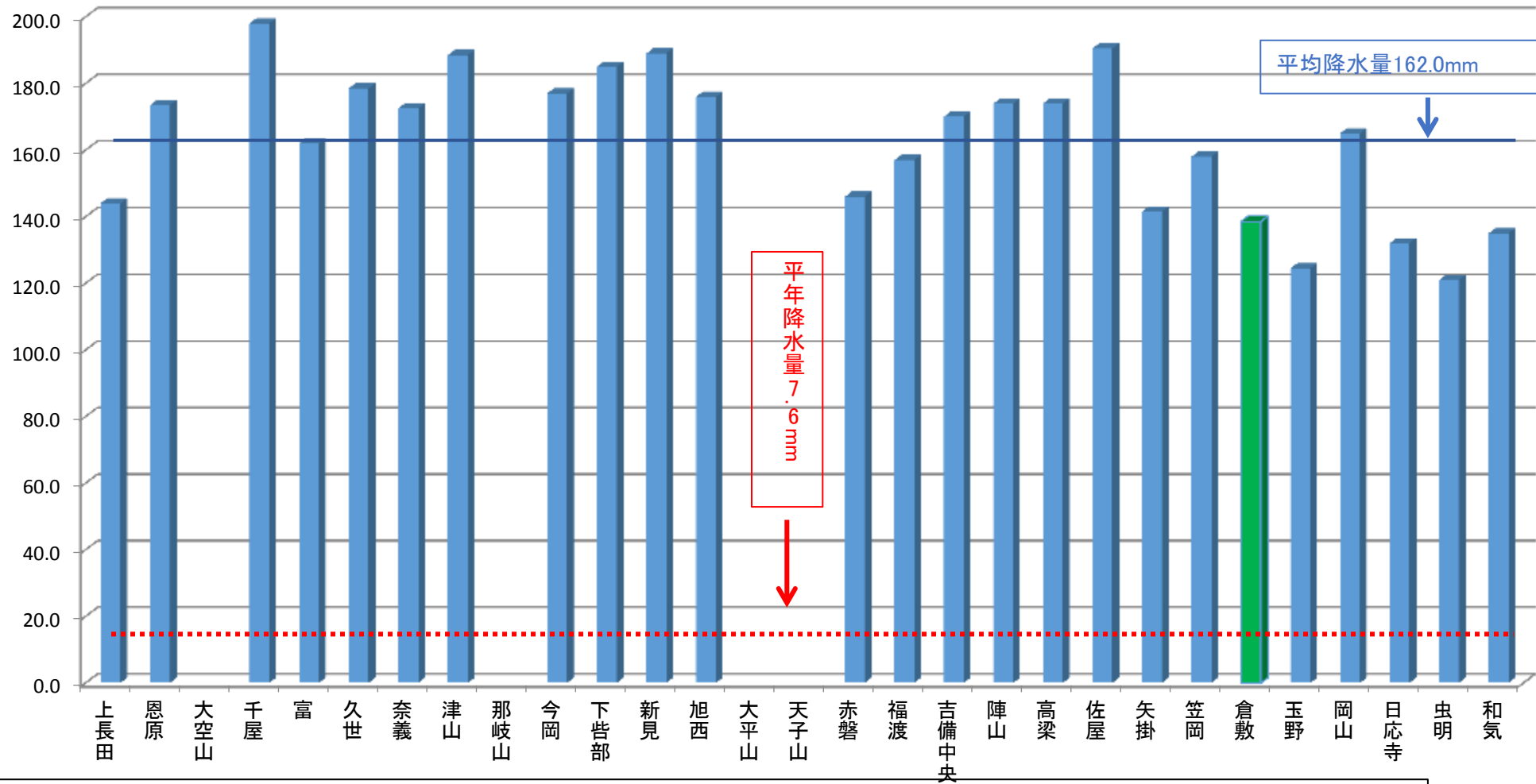
同地区は**氾濫平野内**に立地
している。

地形的には、**洪水被害に遭**
遇しやすい地形といえる。



岡山県の降水量

岡山県拠点別24時間(2018/7/6)降水量



日降水量は7月6日が最大。上図は7月6日の拠点別降水量グラフ。
7月6日の拠点平均は162.0mm、平年降水量7.6mmを大幅に上回った。

C地点

C地点

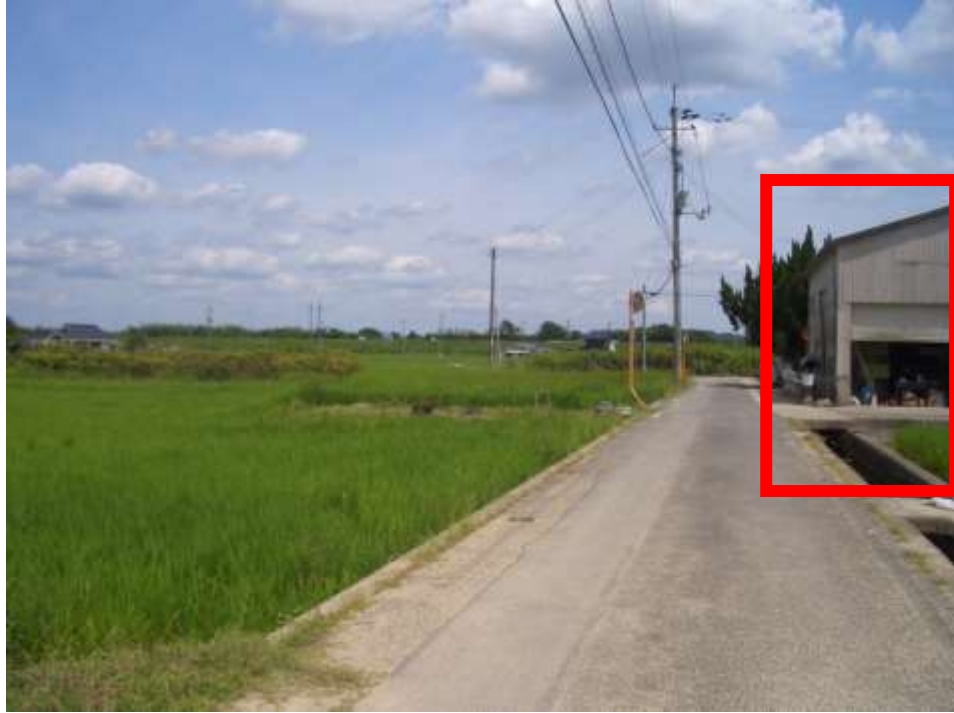


Cさん宅の住民の方よりインタビュー。

- 1) 7月6日午後11時30分に、北方にあるアルミ工場が爆発し、爆風により窓ガラスが割れ、アルミ製ドアに穴が開いた。
- 2) 爆発に驚いていると、間もなく、南方より、小田川の支流の末政川が氾濫し、浸水した。浸水深さは2.5m。当時は、2階へ避難し人的被害はなかった。
- 3) 現在は総社市内に仮住いしている。
- 4) 全ての物を無くした。途方に暮れているが、せめて家にカビが生えないようにと、毎日、窓を開けて空気を入れに来ている。
- 5) Cさんは、我々に対して、大声で話しているうちに、落ち着きを取り戻し、表情がやや和らいできた。肉体労働だけがボランティアではなさそうだ。

D地点

D地点



道路の突き当り（東方）に高梁川の堤防を臨む農業作用所にて、家主の方からインタビュー。

D地点



農業作用所より北方800mのアルミ工場が浸水の前に爆発。同時点では、内水氾濫によって、道路が冠水している状況。東方の近くの高梁川は、堤防端近くまで水深が上がっていた。ブルーシートで覆われている家屋は爆発による飛来物で損傷したもの。結局、高梁川は氾濫しなかった。



アルミ工場の接近写真。爆発の原因や経緯については、巷では様々な憶測が流布されているが、消防庁の発表によると、「原因不明」とのこと。確かなことは、アルミ工場が浸水したことが爆発の引き金になったこと。

D地点



農業作業所内。

1. 続いて、やや離れた小田川の支流が決壊し、約2.5mの高さまで浸水した。
2. 自分たちは、浸水深さが数十cmの段階で、車で避難した。途中で車のエンジンは止まりそうになったが、車にムチを入れる思いで逃げ出した。
3. 作業所内の穀物乾燥機、コンバインなどは全て使用できなくなった。
4. これから、出来ることをやろうと思っている。
5. 近隣の住民の防災意識は低く、避難情報が発令されても、避難する住民はほとんどいない。また、避難訓練も実施されたことがない。
6. 他の地域では、日常的に避難訓練を実施していたために、無事だったということ例がある。住民の防災意識向上教育訓練を望みたい。

D地点



窓ガラスの約2.5mの高さに残る浸水跡



土壁に残る浸水の跡、土壁は流されている

A地点

A地点



訪問地区の入口に設置されている案内板。古い地図では辻田地区の隣りに向畑地区が位置する。新しい地図では向畑地区は辻田地区に含まれているようだ。



バンガロー風の屋根のお宅が「家財の撤去」依頼者宅の裏側。奈良県防災士会の10名のチームにて実施。住人の方は施設に入所中だったため、ご無事。浸水は南方の小田川の支流である末政川の氾濫による。

A地点



依頼者宅の正面。母屋の西側（写真の左）に温室、東側に倉庫。母屋、温室、及び倉庫内の3箇所より家財の撤去を行った。



母屋の玄関の作業前の様子。

A地点



浸水深さは約2.5m。2階は浸水していなかったが、取り壊しの障害となるということで家財は全て運び出した。居住者の方が、子育てをされていた頃の思い出の品を運び出すときは、辛かった。

A地点



2階の部屋。取り壊しの障害となる家財は全て運び出した。



1 Fのキッチン。家財を運び出した後の様子。

A地点



1階にて、キングサイズベッド、押入れの中の蒲団、タンスなどを運び出した後の様子。水を十分に吸収した蒲団は超重量級であった。居住者の方の生活感が痛く感じられた。



1階にて、家財をほとんど運び出した後の様子。

A地点



1階の床の間。ご仏壇及び仏具の撤去には、僧侶による宗教儀式を先行させて欲しいとの声が上がったが、打ちひしがれている被災者の方には言い出せず、仲間は黙々と作業に励んだ。



1階にて、体重と抱えた家財の重みが同時に、浸水し弱った床板に掛かり、踏み抜いてしまった。安全靴を着用していたため、無事だった。

A地点



1 階のトイレ。壁に浸水の跡。



1 階の洗面所。トイレと同様。

A地点



1階の玄関。家財を運び出した跡。浸水の跡が痛々しい。



1階の廊下。家財を運び出した跡。浸水の跡が痛々しい。

A地点



1階の廊下。家財を運び出した跡。材木は反り返っており、依頼者の方が取り壊しを決意されたお気持ちも理解できる。



1階の部屋。左記と同様。

A地点



母屋の東側の倉庫。壁を破り、入口を確保し、物品の運び出しを終えた様子。



母屋の東側の倉庫の入口。浸水跡が残る。

A地点



玄関先。運び出した家財の山。災害ゴミ運搬ボランティアのトラックの到着を待っているところ。

A地点



玄関先。運び出した家財の山。災害ゴミ運搬ボランティアのトラックの到着を待っているところ。

B地点

B地点



Bさん宅の依頼は「ご子息の部屋からお母さんが選別した物品だけを運び出すこと」。愛着の強い物品は取り置きたいという感情は、ごく普通の感情だと思う。合理的に割り切れないのが、人の感情だと思う。

左記の接近写真。

考察

平成30年7月豪雨は、日本全体で死者及び行方不明者数230人という大きな被害をもたらした（8月7日現在、内閣府発表）。

一方、倉敷市真備町の死者及び行方不明者数は51人、一町が日本全体の犠牲者数の22%を占めるという不幸な結果となった。

また、真備町の犠牲者51人の犠牲者のうち70歳以上の高齢者は41人と、真備町の犠牲者数の80%を占めていることが判明した。（岡山県7月21日発表）

真備町において浸水が始まったのが7月6日深夜であることから、避難支援を期待できる同居人の居ない高齢者の犠牲が拡大した可能性が推測できる。改めて、**要援助者に対する避難支援の重要性の認識を強くした。**

設備等の損傷被害を蒙った岡山県内の事業所数が476件に上ったことに対しては、今後の自助公助による復旧を見守って行きたい。